



青少年赤十字

JRCふくしま

編集発行

青少年赤十字  
福島県指導者協議会  
日本赤十字社福島県支部  
〒960-1197  
福島市永井川字北原田17  
TEL024(545)7998

人間を救うのは、人間だ。  
Our world. Your move.

## 学校教育と

### 青少年赤十字理念の融合



青少年赤十字田村地区指導者協議会長  
小野町立浮金小学校長

圓谷 貴

第三十八回青少年赤十字福島県指導者研修会並びに学校公開が、十月三十一日（金）に田村市立緑小学校・移中学校を会場に開催されました。当日は、福島県内外より約三百名の皆様にご来場いただき、無事学校公開が開催できましたこと、心より感謝申し上げます。学校公開では、「視野を広げ、主体的に行動する心豊かな児童・生徒の育成」と題し、二年間にわたる研究成果を発表していただきました。そして当日、心温まるすばらしい授業を参観させてい

ただき、これまでの日々の取り組みの成果や、児童・生徒が大きく成長した様子を拝見させていただくことができました。これもひとえに緑小学校・移中学校の校長先生をはじめとして、諸先生方の努力の賜物と心より感謝申し上げます。さて、青少年赤十字の研究では、「健康・安全」・「奉仕」・「国際理解・親善」の実践目標があり、そして「気づき、考え、実行する」の態度目標があります。今回の研究成果としては、特に「気づき」の

部分に力を入れて実践されていたように思います。これは、ゴミを見つけて拾ったり、困っている友達に自然に手を差し伸べたりするという、普段の生活の中にある当たり前の行動のことです。「気づく」心が育てば、「考え、実行する」ことができ、心豊かによりよく生きることができるということです。

学校での青少年赤十字の活動というと、何か新しいことに取り組むことのように考えがちですが、今までの学校での取り組みを整理し、意識化することで、青少年赤十字の理念と融合できるものと考えます。

今回、田村地区指導者協議会長をお引き受けし、自分自身の勉強となることが数多くありました。福島県の小中学校の加盟率が百パーセントであること、賛助奉仕団という

組織から多大なるご支援をいただいていること、日本赤十字社の様々な取り組みについてなどです。青少年赤十字の理念が全国でつながっていることを実感いたしました。

私自身、今回の経験を通して、これからの学校経営の柱として、青少年赤十字の理念を生かした学校経営に努めて

いきたいと思っています。

最後に、今回の学校公開にあたり、ご協力をいただきました田村地区の校長先生方、各実行委員の先生方に心より感謝申し上げます。

また、たくさんのご支援を賜りました田村市教育委員会様をはじめ、関係各位の皆様々に謹んで御礼申し上げます。

## 「みんなが育つJRC」



田村市立緑小学校長

安 齋 宏 之

「やって良かったと思える研究にしよう」

これは、昨年の四月、最初の職員会議で先生方に呼びかけた言葉でした。以来、研究公開までの一年半は、決して順風満帆とはいきませんでした。が、公開を終えた今、「本当にやって良かったなあ」と思っています。

会場校を引き受けるということ、当然のことながら新たな取り組みが求められ、日々、

多忙な先生方に、負担感を与えることになりました。そこで、校長として、がんばってもらう先生方へ、インセンティブを提供しなければと考えました。その一つは、児童の成長です。我々教師は、どんな苦勞も児童の成長で報われる職種です。だから、この研究が「児童の成長につながる」という見通しを持ってもらうことが必要でした。そこで、JRCの態度目標「気づき・考え・実行する」を研究の柱に据え、その力を

育んでいけば、本校児童の課題である主体性の育成につながるのではないかと、という思いをもてるようにしました。

もう一つは、教師の成長です。先生方は、常に自らの指導力を伸ばしたいと考え、現職教育に取り組んでいます。が、今一つその実感が得られずにいます。そこで、先生方の研究ニーズの応えられる研究体制の構築に努めました。

結果は、研究公開で見えた。ただいたとおり、児童も教師も、まだ多くの課題を抱えています。しかし、この両者の一年半における成長は、大き

なものがありません。児童は、自分というものを大切にし(自尊心の高まり)、「人・もの・こと」へ積極的に関わるようにしました。教師は、児童の気づきを促し、児童の秘めた力を引き出すような働きかけをするようになりました。今後、この成長を止めることなく、更なる成長につなげるよう研究を推進していきたいと思っています。

ながら「視野を広げ、主体的に行動する心豊かな児童・生徒の育成」を研究主題に掲げ、研究に取り組んできました。その中で、青少年赤十字の態度目標「気づき、考え、実行する」力を育てていけば、子ども達に主体性が身につくのではないかと考えました。

うになりました。このような活動を通して、子ども達には、自他のよさを積極的に見つけ認め合う姿や、相手を理解し思いやりのある態度で接しようとする姿が見られるようになり、成長を感じることができました。また、教師側には、活動の見取りによる児童理解が深まったり、子ども達の活動をじっくり見守る「待ちの姿勢」の大切さに気づいたり、これまでの指導を振り返るよいきっかけになりました。

人ひとりが大きくたくましく成長していけるように努力していきたいと考えています。



## 『気づき』の力を大切に

田村市立緑小学校 教諭 今野 千鶴子



「子ども達が変わった…。教師も変わった…。」青少年赤十字推進校の指定を受けて取り組んできた二年間の研究を通して、確かな手ごたえを感じているところです。

緑小学校の子ども達は、素

直で何事にも真面目に取り組む子ども達です。しかし、もつと自分に自信を持ち、主体的に行動できるようになってほしいという願いがありました。今回の指定をよい機会ととらえ、中学校の連携も図り

ながら「視野を広げ、主体的に行動する心豊かな児童・生徒の育成」を研究主題に掲げ、研究に取り組んできました。その中で、青少年赤十字の態度目標「気づき、考え、実行する」力を育てていけば、子ども達に主体性が身につくのではないかと考えました。そこで、「気づき、考え、実行する」を位置づけた問題解決的な学習や縦割り班活動を進めました。実践を重ねるうちに、児童自らが進んで取り組むためには、一人ひとりの「気づき」の力を高めることが大切なのではないかと考え、「人・もの・こと」に積極的に関わりながら、互いのよさを認め合い、思いやりをもつて関わりあえるよう工夫しました。また、縦割り班活動を充実させるために「きずなタイム」を設け、班毎に自分達で計画した活動を実施しました。初めは一緒に遊ぶ計画だけでしたが、回を重ねるごとに、自分たちで清掃場所を決めて清掃したり、学年を超えた勉強会をしたりするなど、徐々に広がりが見られ

## 「JRC活動の大切さ」

田村市立緑小学校 六年 石井 歩



わたしの学校では、「きずなタイム」というのを行っています。「きずなタイム」は去年から始まり、一年生から六年生までが、きずなを深めるために班ごとに計画、運営、実行を自分たちで行いま

す。学校がより良くなるためにどんなことができるのかやみんながもっと仲良くなるためにはどんなことができるかなどを考えて、掃除をしたり、遊んだりしています。遊んでみんなが楽しくなった



り、そうじをして達成感が得られたりします。また、他の班といっしょに活動もできるので、協力が大切だなと思えます。

それから、小学生と中学生でいっしょにごみ拾いのボランティアをしました。これも小学生代表の六年生と、中学生の代表で話し合って活動しました。ごみの拾い方やポイ捨てを注意すること、ルート、後始末も全て話し合って決めました。当日はごみがたくさんあっておどろきました。終わって「自分たちの地域がきれいになったんだな。」と思うと、うれしくなりました。J R C の活動を通して、みんなと協力して、自分たちの

力で最後まで成しとげる大切さを感じることができました。わたしはこれからも地域のためや、誰かのためになることを、進んでやっていきたいと思います。



地区青少年赤十字賛助奉仕団、その他多くの関係機関の皆様からご指導・ご助言をいただきました。おかげさまをもちまして、当日の研究公開においては、県内各地区の皆様をはじめ、遠くは大阪府からなど、総勢約三百名の参会者となる盛大な発表会となりました。心から感謝申し上げます。

本校では、「視野を広げ、主体的に行動する心豊かな児童・生徒の育成」を研究主題に掲げ、副主題を「青少年赤十字の理念を生徒会活動の中心に据えて」とし、態度目標である「気づき・考え・実行する」生徒像を目指し、研究・実践に取り組んでまいりました。発表当日は、生徒会奉仕委員会の活動の歩みをポスターセッションの形で、さらに、各奉仕委員会の活動反省報告を「生徒会全体会」という形で発表し、生徒が自分たちの学校生活をより良くするための「気づき」や「考え」そしてこれまで「実行」してきた活動の様子を参観していただきました。

本校の生徒は、「素直で、

真面目さもある」という良さを持つていましたが、研究を進める内に、真面目な生徒なるとがゆえに、目の前の現象を素直に受け入れてしまい、そこに課題を見出すという「気づき」に欠ける部分が大きいのということが分かってきました。それが、青少年赤十字の実践目標である「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」活動を進めていく中で、少

つ変化し、自分たちの生活をより良くするための「気づき」をするようになってきました。今では、生徒達の中に「気づき」「考え」「実行する」という態度目標が強く意識されるようになっていました。

今後は指定を離れますが、生徒の日々の活動の質がより向上するよう教職員一丸となつてさらに教育活動を推進していきたいと考えています。

## 生徒の成長を感じた研究公開

田村市立移中学校 教諭 五十嵐 堅一



十月三十一日、研究公開当日の朝。私は、期待と楽しみ半分、不安半分といった心境でした。この日、生徒たちは二つの発表をすることになっていました。一つは、六つの奉仕委員会に分かれ、この一年間で取り組んできたことやその成果と課題を来校された方々に発表し、質疑応答を行うというものでした。もう一つは、さらに学校をよくする

## 研究公開を終えて



田村市立移中学校 校長 吉田 美智生

吉田 美智生



平成二十六年十月三十一日、第三十八回青少年赤十字学校公開を行いました。平成二十

五年度に研究指定を受けてからこの間、日本赤十字社福島県支部、青少年赤十字福島県指導者協議会をはじめ、県中

ために、それぞれの委員会の活動をどのようにしていけばいいか、全校生徒で話し合う全体会です。特に、全体会は、リハースルは行ったものの、どんな話し合いになるかはやってみないと分からないものでした。青少年赤十字の研究推進校の指定を受け一年半。青少年赤十字の理念を生徒会活動に取り入れ、生徒の主体性や自己有用感を高める

ために、様々な取り組みをしてきました。生徒たちの成長に手ごたえを感じる一方、もつとこうしていたらと、課題として感じることもありました。そして、生徒たちの発表が始まりました。

本校の生徒たちは、全校生徒が五十一名と小規模のためか素直な反面、積極的に表現することは苦手とする傾向にあります。予想を超える参観者の多さに、私は、生徒たちは委縮し、声が小さくなり、きちんと受け答えができませんでした。しかし、その不安は杞憂に終わりました。生徒たちはむしろ練習の時よりも堂々と発表していました。質疑応答もみんな協力して、答えられる人がしっかりと質問に答ええていました。きつと今まで多くのことに、主体的に取り組んできたことが自信につながったのだと思います。

全体会でもその雰囲気は継続され、多くの人に囲まれている状況にも関わらず、数多くの建設的な意見が出されました。しっかりと考えて、さら

に勇氣を出して発言する生徒の姿に胸が熱くなる思いでした。

今回、高いハードルを設定しましたが、生徒たちはそれを越えて見せてくれました。ただ、これで終わりではありません。生徒たちの心の中に刻まれた「気づき、考え、実行する」を今後も生かし、生徒の可能性をさらに広げていけるように、我々も頑張っていきたいと思っています。



## 青少年赤十字作品募集 「詩・100文字提案」

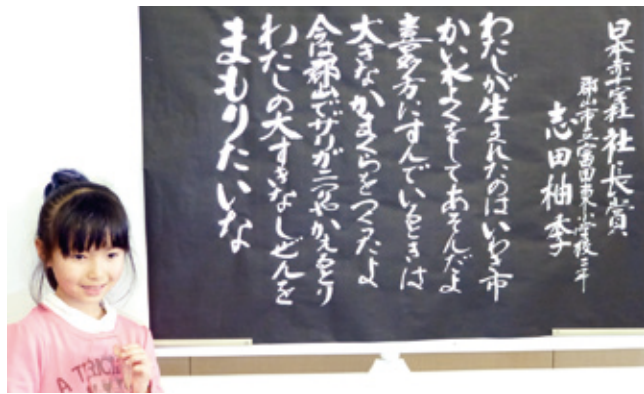


青少年赤十字作品募集は「青少年赤十字活動の活性化と意識を高めること」を目的にして平成十八年から今年度で九回目の作品募集となります。海外の赤十字から寄せられた救済金で行われている「東日本大震災復興支援推進事業」の一つとして実施され、三年目となります。

最優秀に選ばれた作品より「日本赤十字社社長賞」「日本赤十字社福島県支部長賞」が選ばれ、その他に「福島県青少年赤十字指導者協議会会長賞」「福島県青少年赤十字賛助奉仕団委員長賞」が選ばれます。また長年にわたり作品を応募した学校に「学校奨励賞」が、今年度からはその他に「学校賞」を設定し、選考されました。

今年度は六六校から七二二〇作品の応募がありました。学校数は昨年の九四校には及びませんが昨年度までの一人が二作品まで提出から、今年度から一人が一作品の提出となったことを考慮すると昨年の七五三九作品と比べ一校あたりの応募者数が増加してい





## 「わたしの大きな自ぜん」

ることがうかがえます。作品別で見ますと『いのちの詩・愛の詩』に九三〇点、一〇〇文字提案『あたたかい言葉のプレゼント』に九九九点、「わたしの夢・福島のみらい」に二八一四点、「お友だちのすばらしいところ」に二二〇五点、高校生対象の「東日本大震災で、私が『気づき』『考え』『実行したこと、実行しようと考えていること』」に二七

二点の応募がありました。

慎重に審査をするために一次審査を四八名の審査員の先生に見ていただき、その集計をもとに十一月十八日(火)日赤県支部において十二名の先生方に二次審査をしていただきました。その結果日本赤十字社社長賞一点、日本赤十字社福島県支部長賞五、福島県青少年赤十字指導者協議会会長賞一点、福島県青少年赤

郡山市立富田東小学校

二年 志田 柚季

私は、おとうさんのしごとのおかげで、これまで三回も、すむ場所がかわりました。ふくしまは、会津地方、中通り、はま通りの三つの地方に分かれています。わたしは、この三つの地方すべてにすんだきちようなけいけんが出来ました。どの地方もよいところがたくさんあって、すむたびにわたしの大きな場所になっていきます。この大きなふくしまの自ぜんを大切にしていきたいです。

社長賞

「わたしの夢・福島のみらい」

郡山市立富田東小学校

二年 志田 柚季

わたしが生まれたのは、いわき市。かい水よくをしてあそんだよ。喜多方にすんだるときは、大きなまくらをつくったよ。今は郡山で、ザリガニつりや、かえるとり。わたしの大きな自ぜんを、まもりたいな。

## 「故郷の復興を願って」

いわき市立草野中学校

二年 榎原 真希



私は、双葉町に住んでいます。そこで、吹奏楽部に所属し充実した日々を送っていました。そのかけがえのない故郷も今、荒れ果てて牛やダチョウが走り回っています。人が町に帰って住むまでに、何年かかるのでしょうか。故郷のために、私には何ができるのか何度も考えてきました。答えの出ない問いを、心の

関係者が出席して行われ、野崎洋一事務局長から受賞者に賞状と盾が手渡されました。式の中で受賞作品が本人から披露され感銘深いものとなりました。今年度も積極的に応募いただいた学校、適切なご指導いただきました指導者の方々、

たくさん応募いただいた児童生徒の皆さんに感謝とお礼を申し上げます。社長賞、支部長賞、県青少年赤十字指導者協議会長賞、県青少年赤十字賛助奉仕団委員長賞を受賞した四人の方々から受賞の感想をいただきました。

支部長賞

「わたしの夢・福島のみらい」

いわき市立草野中学校

二年 榎原 真希

昔のわたしの夢それは双葉で生きることだった今の夢それは双葉のわたしたちの故郷に役立つこときつと実現させようわたしのために双葉のために皆のため故郷のため

中で繰り返しながら自分に出ることを探していきます。皆さんにも、心に傷を負い、思い出を奪われた人がいることを忘れないでほしいです。

## 「いっでがんばる」

須賀川市立第二小学校

四年 渡部 隼



須賀川に来て友だちがたくさんできました。毎日楽しいです。

じいちゃんが双葉の家の様子をおしえてくれました。庭

## 「さしのべられた光」

福島成蹊高等学校

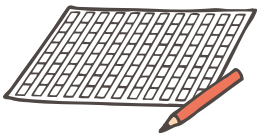
一年 小松 紗綾



何もかもがうまくいかず、自分のカラに閉じこもっていた時、一人の友達がそんな私のカラを壊そうとしてくれた。彼の一言は、立ち止まっ

は草がぼうぼうで手でかきわけて、かれ草だらけになりながら、家に入るそうです。行ってみたくけど、少しこわいです。もう帰りたくとも帰れないからぼくは、ここがばんろうと思います。じいちゃんの手伝いをたくさんして、いつか人のために働ける大人になりたいです。

ていた私に「一歩踏み出す勇氣」を与えてくれた。諦めず前に進むことを教えてくれた彼は、今でも私の自慢の親友。もし誰かが落ち込んでいたら、彼のように人を励ますことの出来る人になりたい。



福島県指導者協議会長賞

## 「いのちの詩・愛の詩」

須賀川市立第二小学校

四年 渡部 隼

双葉の家に取りに行きたいもの集めていたキーホルダー一緒にねてたくま小さい時の写真

思い出いっぱいだけどもう帰れないだからここがばんろう一生けんめいがんばる夢に向かってがんばる

福島県賛助奉仕団委員長賞

## 「あたたかい言葉のプレゼント」

学校法人福島成蹊学園

福島成蹊高等学校

一年 小松 紗綾

私が落ち込んでいる時、貴方が言ってくれたこと。

「空を自由に飛ぶトリには、羽がある。一歩踏み出す足ならあるだろう。」

とまったままの私に言って励ましてくれた。

そんな貴方はわたしの自慢の親友。いつも本当にありがとう。

## 平成26年度 青少年赤十字国際交流集会

JRC/RCY International Meeting,  
"Mt. Fuji 2014"

日本赤十字社では青少年赤十字の実践目標の一つである「国際理解・親善」の具体的な活動の機会として海外と日本の青少年赤十字メンバーが直接交流できる国際交流集会を行っています。

今年度は十月三十一日（金）から十一月三日（月）

までの四日間、アジア・大洋州の十九の国や地域から三十八名の青少年赤十字・赤新月メンバーが日本全国からの七十六名の青少年赤十字メンバーと富士山麓で相互に意見を交換し、活動の紹介や文化紹介を行いました。

福島県からは会津地区から二名、指導スタッフとして一名の先生が参加し有意義な交流活動が行われました。

Mt. Fuji  
2014に参加して

福島県立会津学鳳高等学校

一年 大橋 優笑

私は Mt. Fuji 2014 に参加して、幅広い視野での赤十字を考え、学ぶことができました。

四日間を通して最も印象に残ったのは、「違いを理解し、互いを認め合うためには、何ができるか」についてのディスカッションです。日本と海外の赤十字活動ではいろいろな違いがあるだろうと思っていましたが、実際に意見交換



をしてみると、海外では実践的な活動が多いことを感じました。特に香港の救急法の知識を競い合うという大会は、知識の定着と自分のわからなかったことを再確認できるという点で、とても良い活動だと思いました。今まで行ってきた活動を継続し、海外の良いところをできることから少しずつ取り入れて、実践的な活動を増やしていきたいです。

今回この青少年赤十字国際交流事業に参加できたことは私の大きな宝物になり、また、活動への意欲になりました。

参加したこと、よい意見が聞けてことだけで満足せず、これからは、この経験を生かしてどう実行するかを考えて、今まで以上にJRC活動を頑張りたいです。

## 「充実していた Mt. Fuji 2014」

福島県立喜多方桐桜高等学校

二年 高久みなみ

静岡県にある東山荘にて行われた青少年赤十字国際交流事業Mt. Fuji 2014に参加しました。行く前までは海外の人とコミュニケーションを取れるかと不安でしたが、日本メンバーも海外メンバーもみんなフレンドリーですぐに仲良くなることになりました。

グループワークでは、各国の抱えている問題を発表し合いました。国が違う人に自分の意見を伝えるのは難しく苦戦した部分も多くありました。しかし、海外メンバーはしっかり堂々と自分が伝えたいこ



とを発表していて、同年代なのに感心してしまいました。フィールドワークでは、同じ班の友達と協力して一つのことを成し遂げる難しさ喜びを味わいました。また、文化交流では各国の伝統芸能、国歌を披露し合い、お互いの文化を知ることができ、より一層絆が深まりました。

今回の国際交流では通訳を通しての交流でした。私はこれから語学力を身につけ、自ら行動しさらにコミュニケーション能力を高めていきたいと思いました。

## 文化の違いを理解し、 互いを認め合う

福島県立福島東高等学校

教諭 松本 仁子

今回は国や地域の文化や考えの違いを理解し、今後国際的な場に出たときに相手の立場になって考えられる人になれるようにしようというのをテーマに、四日間のプログラムが組まれました。

私のHRは中国、ミャンマー、パキスタン、青森、福島、山口、長崎のメンバーでした。学校生活での掃除の仕方から学校の教育制度の違いまで各国の様子を知ることができました。パキスタンメンバーからマララさんについて詳しく知ることもできました。みんなでまとめた教育に対する意識の違いは、貧困や衛生状態にもつながり、正しい教育の必要性を強く感じました。

赤十字活動の様子では、東日本大震災に継続してボランティア活動を続けてくれていくことに深く感動しました。



その中でも東松島市の「おのくん」というキャラクターを子供みたいにかわいがり、いつまでも震災を忘れないというボランティアには女子高校生ならではの優しさを感じ、聞いた時にはほろほろと涙がこぼれてしまいました。充実した四日間を過ごすことができ、一歩前進を見せようと、最後に英語でのスピーチに挑戦してみました。語学奉仕団の皆様、同室の英語の先生、レッスンありがとうございました。



## 平成26年度国際交流事業 Mt. Fuji 2014 プログラム

	10月31日（金）	11月 1 日（土）	11月 2 日（日）	11月 3 日（月）	
7：00		起 床	起 床	起 床	
8：30		朝 食	朝 食	朝 食	
9：30		フィールドワーク （含：発表）	グループディスカッション 3 （含昼食）	閉会式 （振り返り）	
10：30				グループディスカッション 2	10：30 日本メンバー出発 10：40 海外メンバー出発
12：00					
13：00 13：30 14：00		記念写真撮影			
15：30	グループディスカッションの 発表				
16：00 16：30 17：00	グループディスカッション 2	まとめ			
18：00		夕食			
18：30		文化交流の準備			
19：30 20：00 20：45	グループディスカッション 1	青少年赤十字活動紹介	文化交流		
21：00	HR（振り返り・先見）	HR（振り返り・先見）			
21：30 22：00	入浴・就寝準備	入浴・就寝準備	HR（振り返り・先見）		
22：30			入浴・就寝準備		
	消 灯	消 灯	消 灯		

今年には十二月から寒波が到来し早い冬を迎えました。そんな中「詩・一〇〇文字提案」の表彰式が県支部で行われま

あ  
と  
が  
き



した。  
お忙しい中、原稿をお寄せいただきました方々、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

### 赤十字の豆知識…③

## 「赤十字の原則」

赤十字は1863年に誕生以来、長い間「赤十字の原則とは何であるか」を具体的に明示したものは有りませんでした。しかしその精神は、アンリー・デュナンがソルフェリーノの戦場において、敵味方の別なく負傷者を救護した行為の中に、ジュネーブ条約や国際会議の決議の中に、そして、長い間の活動の中に脈々と流れています。

現在の国際赤十字・赤新月運動の基本原則は、1965年第20回赤十字国際会議で、「人道」「公平」「中立」「独立」「奉仕」「単一」「世界性」の7つが決議され、宣言されました。基本原則の中で最も大切な点は「人間の命は尊重されなければならないし、苦しんでいる者は、敵味方の別なく救わなければならない。」という、人間の尊重であり、「人道」なのです。赤十字は、「人道」に基づく活動を実践して、戦争のない、平和な世界になることを願っています。